
milk candyの魔法

黒竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

m i l k c a n d y の魔法

【Nコード】

N 6 4 4 1 Z

【作者名】

黒竜

【あらすじ】

私は彼が好き。 そんなある日、一緒に帰る事となって… そして彼と私はm i l k c a n d yで繋がっていた…?!

（前書き）

初めまして、黒竜です。この作品は初となる投稿ですので、どうか温かい目で見守っていただくと有り難いです。

彼は私の事を知らない。

違うクラス。でも同級生。

そんな時、彼が話しかけてきた。

「なあ、アンタ…2 - Aの奴だったよな？」

（あ、私の事知ってる…。）

「そうだけど？」

少し緊張してしまった。

…少し呆気無い返事だっただろうか？

けど彼は

「だよな！何か見覚えあったからさ。あ、オレは2 - B！好きな教科は英語。宜しくな！」

と言った。

「あ、わ、私は2 - A！好きな教科は…英語…。うん、英語！」

「何だそれ。自分で納得してんじゃないか。」

慌てて言うと、クスクスと笑われてしまった。

だけど、そんな彼が好きなかもしれない。

私は一目惚れしたのだろう。

「んじゃ、帰り一緒に帰ろうぜ。」

「え、でも…っ。」

「良いつてば。どうせ一人だろ？」

…確かに、彼の言う通り、帰りは一人だ。

友達が居ない訳じゃないけど…

私は此処の中学校から家が遠いし、同じ方向の人が居ない為、帰りは一人。

でも彼は同じ方向。

彼は同じ方向だし、私の初の一目惚れの人であって、優しいから好き。

彼は帰り道、candyを舐めながら帰っている。

偶然ながら私もcandyを舐めながら帰宅する。

一度で良いから、一緒に帰りたい。

一緒に喋りたい。

何のcandyを舐めているか知りたい。

それが現実となった日が来た。

「うつ…確かに。じゃあ、一緒に帰ろ？」

「おう！！じゃあ、また後で！」

「う、うん！！」

ブンブンと手を振りながら教室に戻って行っただ。

その時、彼が尻尾を振る犬みたいに見えた。

(…可愛いなあって思っちゃったりして)

我ながらクスツと笑った。

中学校は、もう明日から冬休み。

だから、今日だけしか帰れないけど…

彼と帰るのが現実となってくれたから、良しとしよう。

- - - - -

そして、お待ちかねの帰宅時がやって来た。

「バイバイ！また年明けね！」

「バイバーイ！」

「じゃあね、良いお年をー！！」

「うん！！またね！良いお年をー！！また来年！」

友達に別れを告げ、2 - Bの前で待っていた。

「あ、悪イ悪イ！待たせたか？」

「全然！用は済んだ？」

「ああ。アンタは大丈夫なのか？」

「YES！」

「OK, Are you ready？」

「イエーイ！！」

「つて、何やってんだ、オレら。」

「確かに……」

「……」

「……プツ！アハハッ！！！」

彼と私は笑い過ぎて笑い泣きしてしまった。

そしてお互いに誰よりも気が合ったと思った瞬間。

「うん！！またね！良いお年を！！また来年！」

友達に別れを告げ、2・Bの前で待っていた。

「あ、悪い悪い！待たせたか？」

「全然！用は済んだ？」

「ああ。アンタは大丈夫なのか？」

「YES！」

「OK, Are you ready？」

「イエーイ！！！」

「って、何やってんだ、オレら。」

「確かに……」

「……」

「……プッ！アハハハッ！！！」

彼と私は笑い過ぎて笑い泣きしてしまった。

そしてお互いに誰よりも気が合ったと思った瞬間だった。

-そして、帰り道-

やっぱり彼はcandyを舐めている。

「ね、何のcandy?」

「ん?milk candyだよ。」

「!」

milk candy...

私がいつも帰宅時に食べていて、尚且つ大好きなcandy、

まさか彼も舐めているなんて...

「私もmilk candyだよ。」

ニコツと微笑んで言った。

「マジかー！オレら付き合ったら上手くいけるかもなー！……あ。」

「へ……。」

…彼はとんでもない事をさり気なく言った気がする。

「あ、あ、い、いや……そ、その……」

どもる彼。

（赤面は隠せてないですよ、わんちゃん。）

真っ赤になった時も犬の様に可愛い。

……今がc h a n c e か？！

「……あの……、付き合ってくれー！」

……はいいいいいい？！……

「単刀直入で悪いけど…でも、実はお前の事ずっと前から知ってて…、優しいし、オレのタイプだし…だから…」

「私も！！私もずっと前から知ってたよ！！！！ずっと前から大好きだった！」

「…！！じ、じゃあ…」

「「今後から、恋人として宜しくお願い致しますっ！！！」」

…こうして、彼と私は付き合った…

…

…次の日…

『ピンポン』

「はいはい！！！」

「よっス！解んねエ所があつて、来ちゃいました！」

次の日から、玄関を開けると雪と共に彼が居る。

只午後9時。

こんな遅くに来て大丈夫なのだろうか？

しかも今日はクリスマス・イブ…。

とりあえず、私の部屋に上がらせた。

- - - - -

「こんな風になってんだ…あ、milk candy！」

彼は少し私の部屋を拝見したら、私が机の上に置いていたmilk
candyをすぐに発見した。

「一緒に食べる？」

と聞くと

「おう！ありがとう！」

と笑顔で答えてくれた。

「今日はクリスマス・イブだな…」

「そうだね…」

二人でそう呟くと、自然と目が合った。

そして甘いkiss….

これを引き起こしてくれたのはmilk candy、

そう、これは…

『milk candyの魔法』

- END -

（後書き）

僕は、初に飴に関する恋愛ストーリーが書きたかったもので… 上
手く書いていれば嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6441z/>

milk candyの魔法

2011年12月21日19時51分発行